

こうして毎日、森の中にくらすのは、ほんとうにぜいたくだと思う。

ただ、ないものねだりの欠点は、たとえば洗濯物干しや野菜の乾燥などに、じゅうぶんな日照が得られないということだ。ふつうに干しては、ぜったいに乾かない。真冬は薪ストーブ、真夏は除湿機のを借り、またアイロンや隣村のコインランドリーに通って、洗濯物を乾かす努力をする。

そんな中、ジーンズが日中の外気でカラッと乾く快晴日が、年に数日ある。それが、たまたま定休日であれば、早朝からはりきって洗濯に精をだし、家中のジーンズや厚手のリネンをはじから集めて、洗っては干し、洗っては干しをくりかえす。

やがて予報どおり、限られた小さな空に太陽が燦燦と照りかがやく。なんて、しあわせだろう！テラスに、テーブルの脚立をいくつも並べ、そこに脱水機から出したばかりの洗濯物を広げる。

けっして、縦に吊るさない。

日照を効率よく活用するために、洗濯物の最大面積を太陽にむけて広げ、脚立の下からも風を通し、数時間後に表裏をひっくり返す。さらに、まな板、キッチン用品、洗面器、浴槽の蓋も広げると、テラス一面が干し物で埋まる。

いつだったか、モロッコ旅行でトドラー渓谷地帯を通ったとき、谷底に住むベルベル人たちが、川原の岩に洗濯物を広げて、乾かしていたのを見た。赤や濃緑などの原色を着る彼らの洗濯物は、まるで現代アート展のように川原を染めていた。渓谷地帯に住む彼らもまた、くらしのためには日照が必要で、太陽が恋しいにちがいない。

テラスに洗濯物を広げる自分は、ごく自然にベルベル人になる。さらに干し終わったあと、ベルベルの女たちのように、自分も洗濯物のひとつになって寝そべってみる。

ほら、北アフリカの太陽は金色で、そしてこんなにも熱く肌に沁み入る！